

## 特集 外国史家が読み解く

### 『近代日本のヒストリオグラフィ』

## 序

小澤 実

本特集は、二〇一六年三月六日（日）一三時より、慶應義塾大学三田キャンパス大学院棟三一三教室にて、科研費基盤研究（A）「原史料メタ情報の生成・管理体系の確立及び歴史知識情報との融合による研究高度化」を主催とし、立教SFR「グローバルヒストリーのなかの近代歴史学」を共催とする公開シンポジウム「外国史家が読み解く『近代日本のヒストリオグラフィ』」での報告原稿に基づく。松沢裕作編『近代日本におけるヒストリオグラフィ―』（山川出版社、二〇一五）が刊行された。これは、二〇一四年一月に東京大学本郷キャンパスで開催された史学会シンポジウムでの三名の報告をベースに、八名の執筆者の個別論文をまとめたものである。論集の目的は、大

立せんとする近代日本において、「歴史をいかに叙述すべきか」をめぐっていかに多様な試みがおこなわれていたのかを活写することにあつた。従来の史学史が、たとえば歴史家個人の個性と叙述の特徴、時代の趨勢を反映しているとみなされた歴史意識、そして日本近代史の一部として、天皇制への批判と帝国日本の植民地化に対する贖罪意識という観点からの歴史整序にリソースを投資してきたように思われるのに対し、本論集では、一見所与の存在と思われるがちである史学に関わる国家制度の諸側面や、後世には失われてしまったヒストリオグラフィのあり方に注目している。目次を記しておきたい。

はしがき (松沢裕作)

第一章 「修史局における正史編纂構想の形成過程」 (松沢裕作)

第二章 「明治期の史料探訪と古文書学の成立」 (佐藤雄基)

第三章 「明治期島津家における家史編纂事業」 (寺尾美保)

第四章 「一八九〇年代のアカデミズム史学―自立化への模

索 (廣木尚)

第五章 「史学の「純正」と「応用」―坪井九馬三にみるア

カデミズム史学と自然科学の交錯」 (中野弘喜)

第六章 「社稷」の日本史―権藤成卿と(偽史)の政治学―

(河野有理)

第七章 「一九二〇年、茨木キリシタン遺物の発見」 (高木

博志)

第八章 「一九三〇〜五〇年代の美術史学と歴史学」 (太田

智己)

次々ページより始まる、松沢裕作『近代日本のヒストリオグラフィ―』の意図と達成」は、本論集で取り上げた諸テーマが、単なる従来型史学史の落穂拾いや否定ではなく、従来の成果をも包含した今後の史学史研究の可能性を広げるためのパイロットケースたりうることを、具体的に指摘する。

史苑 (第七七卷第一号)

このような編者自身による論集の読みどころをふまえた上で、しかるのちに三名の外国史家が、自らのフィールドでの知見と関心にしたがって、論集を読み解く。西洋中世史家である菊地重仁の「近代日本における／にとつてのヨーロッパ中世研究―ドイツ歴史学界との関わりから―」では、日本に近代歴史学をもちこんだとされるルートヴィヒ・リース(彼もまた中世史家である)が教育を受けた一九世紀ドイツのドイツ中世史研究へと分け入り、そのドイツと日本の歴史学の相関関係に注目する。西洋近代史・思想史を専門とする小山哲の「史学史」の線を引き直す―ヒストリオグラフィ―における「近代」をどう捉えるか―」では、日本における近代歴史学の成立をドイツ史学から一方的影響の結果としてではなく、従来日本が蓄積していた要素によって改変された上での結果であることを、著者の専門である東欧との比較を通じてあぶりだそうとする。明清史の第一人者である岸本美緒による「近代東アジアの歴史叙述における「正史」」は、東アジアにおけるヒストリオグラフィ―実践の「正統的な」あり方である「正史」に注目し、論集内で触れられる近代日本の「正史」概念にコメントしながら、中国と日本でのその理解のあり方の差異を読み解く。

外国史家による、それぞれの内在的関心に基づく本論集

序（小澤）

に対するコメントは、この論集が内包する論点を、編者松沢による「意図と達成」とは別の方向へと深化させうることを雄弁に物語っている。つまり、『近代日本のヒストリオグラフィ』のなかで扱われた諸テーマは、その執筆者が意図していたにせよそうでなかったにせよ、すでにグローバル化が急速に進行しつつあった近代世界の中で生まれ得たものであったことが示唆される。本特集を読み通した私たちは、過去の世界と書き手が今そこに立つ現在を結びつける人間の本質的行為とも言えるヒストリオグラフィもまた、ヒト・モノ・思想などの世界規模での移動や交換に注目するグローバルヒストリーという観点から論じうるものであることを実感するだろう。

（本学文学部准教授）